

## 夏目漱石作品における「苦笑」と「微笑」

——『門』と『道草』の場合——

前 田 友 美

【門】は明治四十三年三月一日から六月十二日まで、全百四回にわたって、東京・大阪の両朝日新聞に連載され、【道草】は、大正四年六月三日から九月十四日まで、全百二回にわたって、東京・大阪両朝日新聞に連載された。【門】から【道草】が執筆されるまでには約五年の期間があるが、この両作品の末尾には似通っている点が見られる。末尾はそれぞれ以下のようになっている。先に【門】を挙げる。

小康は斯くして事を好まない夫婦の上に落ちた。ある日曜の午宗助は久し振りに、四日目の垢を流すため横町の銭湯に行つたら、五十許の頭を剃つた男と、三十代の商人らしい男が、漸く春らしくなつたといつて、時候の挨拶を取り換はしてゐた。若い方が、今朝始めて鶯の鳴声を聞いたと話すと、坊さんの方が、私は三日前にも一度聞いた事があると答へてゐた。

「まだ鳴きはじめだから下手だね」

「え、まだ充分に舌が回リません」

宗助は家へ帰つて御米に此鶯の問答を繰り返して聞かせた。御米は障子の硝子に映る麗かな日影をすかして見

て、

「本当に有難いわね。漸くの事春になつて」と云つて、晴れ々しい眉を張つた。宗助は縁に出て長く延びた爪を剪りながら、

「うん、しかし又ぢきに冬になるよ」と答へて、下を向いたまゝ、鉢を動かしてゐた。

〔門〕二十三

次に『道草』を挙げる。

「まだ中々片付きやしないよ」

「何うして」

「片付いたのは上部丈ぢやないか。だから御前は形式張つた女だといふんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「ぢや何うすれば本当に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない。一遍起つた事は何時迄も続くのさ。たゞ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」

健三の口調は吐き出す様に苦々しかつた。細君は黙つて赤ん坊を抱き上げた。

「お、好い子だ。御父さまの仰やる事は何だかちつとも分りやしないわね」

細君は斯う云ひ云ひ、幾度か赤い頬に接吻した。

〔道草〕百二

この両作品の末尾における共通点は、〔門〕における宗助と御米、〔道草〕における健三と御住の、それぞれの夫婦の視点が交わらないまま終わっていくことである。<sup>(注)</sup>宗助も健三も、過去の出来事に苦しみられ、片付かない問題を抱えたまま、一応の小康状態を迎え、日常に戻り、物語は終結する。本論文では、この両作品における共通点、

また相違点の考察を目的とするものである。

まず、主人公である宗助と健三には「苦笑」が多いことが、共通点の一つとして考えられるのではないだろうか。<sup>(註2)</sup>  
【門】において、宗助の「苦笑」が含まれる描写は七例挙げられる。それは以下のようになっている。

① 京都の襟新と云ふ家の出店の前で、窓硝子の鐔を突き付ける様に近く寄せて、精巧に刺繍をした女の半襟を、いつ迄も眺めてゐた。その中に丁度細君に似合さうな上品なのがあつた。買つて行つて遣らうかといふ氣が一寸起るや否や、そりや五六年前の事だと云ふ考が後から出て来て、折角心持の好い思ひ付をすぐ揉み消して仕舞つた。宗助は苦笑しながら窓硝子を離れて又歩き出したが、それから半町程の間は何だか詰らない様な氣分がして、往來にも店先にも格段の注意を払はなかつた。(二)

② 「其内には又屹度好い事があつてよ。さう／＼悪い事はかり続くものぢやないから」と夫を慰さめる様に云ふ事があつた。すると、宗助にはそれが、真心ある妻の口を借りて、自分を翻弄する運命の毒舌の如くに感ぜられた。宗助はさう云ふ場合には何にも答へずにたゞ苦笑する丈であつた。(四)

③ 「理屈を云へば、此方にも云い分はあるが、云ひ出せば、とゞ詰りは裁判沙汰になる許りだから、証拠も何もなければ勝てる訳のものぢやなし」と宗助が極端を予想すると、  
「裁判なんか勝たなくたって可いわ」と御米がすぐ云つたので、宗助は苦笑して已めた。(四)

④ さうして苦笑しながら、

「此暑いのに、斯んなものを立て、置くのは、氣狂いじみてゐるが、入れて置く所がないから、仕方がない」と云ふ述懐をした。(四)

⑤ 午過に歸つて来て見ると、御米は金盥の中に雑巾を浸けて、六疊の鏡台の傍に置いてゐた。其上の所丈天井の色が變つて、時々雫が落ちて来た。

「靴ばかりぢやない。家の中迄濡れるんだね」と云つて宗助は苦笑した。御米は其晩夫の為に置炬燵へ火を入れて、スコツチの靴下と縞羅紗の洋袴を乾かした。(六)

⑥ 宗助は近付いて、此揉苦茶になつた紙の下を覗いて覺えず苦笑した。(七)

⑦ 「死屍累々とはあの事です。それが皆夫婦なんだから實際氣の毒ですよ。詰りあすこを三三丁通るうちに、我々は悲劇にいくつ出遭ふか分らないんです。夫を考へると御互は實に幸福でさあ。夫婦になつてるのが悪らしいつて、石で頭を破られる恐れは、まあ無いですからね。しかも双方ともに二十年も三十年も安全なら、全く御目出度いに違ありませんよ。だから一切位肖つて置く必要もあるでせう」と云つて、主人はわざと箸で金玉糖を挟んで、宗助の前に出した。宗助は苦笑しながら、それを受けた。

こんな冗談交りの話を、主人はいくらでも続けるので、宗助は已むを得ず或る辺までは釣られて行つた。けれども腹の中は決して主人の様に太平樂には行かなかつた。辞して表へ出て、又月のない空を眺めた時には、其深く黒

い色の下に、何とも知れない一種の悲哀と物凄さを感じた。(二十二)

このように「苦笑」が多く見受けられる宗助であるが、特に重要なのは、②の例に挙げた、自分と御米を「翻弄する運命」(四)に対する「苦笑」であろう。また、⑦の坂井との会話においても、坂井を通じて、今にも自分たちの前へ現われるかもしれない安井の影に、宗助は脅かされずにはいられない。同じ場面で坂井の語る、蛙の夫婦が無残に殺されていくエピソードも不吉な印象を与えるものである。それらに対し、宗助は「苦笑」で応えるしか出来ないのである。宗助の「苦笑」には、自分たち夫婦を脅かす現実に対する諦観が含まれていると考えられる。一方、『道草』の主人公、健三に、同じような特徴が見られる。心の中や腹の中の「苦笑」も含めると、十例の描写が挙げられる。

① 姉は健三の子供の時分、「今に姉さんに御金が出来たら、健ちゃんの何でも好きなものを買って上げるよ」と口癖のやうに云つてゐた。さうかと思ふと、「こんな偏屈ぢや此子はとても物にならない」とも云つた。健三は姉の言葉やら語気やらを思ひ浮べて、心の中で苦笑した。(四)

② 他に物を食はせる事の好きなのと同時に、物を遣る事の好きな彼女は、健三が此前誓めた古ぼけた達磨の掛物を彼に遣らうかと云ひ出した。

「あんなもののあ、宅にあつたつて仕方がないんだから、持つて御出でよ。なに比田だつて要りやしないね、汚い達磨なんか」

健三は貰ふとも貰はないとも云はずにたゞ苦笑してゐた。(一六)

③ 「御前島田の事を知つてゐるのかい」

「あの長い手紙が御常さんつて女から届いた時、貴方が御話しなすつたちやありませんか」健三は何とも答へずに一旦下へ置いた名刺を又取り上げて眺めた。島田の事を其時どれ程詳しく彼女に話したか、それが彼には不確かであつた。

「ありや何時だつたかね。餘ッ程古い事だらう」

健三は其長々しい手紙を細君に見せた時の心持を思ひ出して苦笑した。(十二)

④ 健三は昔此男につれられて、池の端の本屋で法帖を買つて貰つた事をわれ知らず思ひ出した。たとひ一錢でも二

錢でも負けさせなければ物を買つた例のない此人は、其時も僅か五厘の釣銭を取るべく店先へ腰を卸して頑として動かなかつた。董其昌の折手本を抱へて傍に佇立んでゐる彼に取つては其態度が如何にも見苦しくまた不愉快であつた。

「こんな人に監督される大工や左官はさぞ腹の立つ事だらう」

健三は斯う考へながら、島田の顔を見て苦笑を洩らした。しかし島田は一向それに気が付かないらしかつた。(十六)

⑤ 「此方の先生も一つ御儲けになつたら如何です」

吉田は突然健三の方を向いた。健三は苦笑しない訳には行かなかつた。仕方なしに「え、儲けたいものですね」と云つて跋を合せた。(十七)

⑥ 「いや君等は僕のやうに過去に煩らはされないから仕合せだと云ふのさ」

青年は解しがないといふ顔をした。

「あなただつて些とも過去に煩はされてゐるやうには見えませんよ。矢つ張り己の世界は是からだといふ所があるやうですね」

今度は健三の方が苦笑する番になつた。(四十五)

⑦ 「女は詰らないものね」

「それが女の義務なんだから仕方がない」

健三の返事は世間並であつた。けれども彼自身の頭で批判すると、全くの出鱈目に過ぎなかつた。彼は腹の中で苦笑した。(五十三)

⑧ 首の回らない程高い襟を掛けて外国から歸つて来た健三は、此惨憺な境遇に置かれたわが妻子を黙つて眺めなければならなかつた。ハイカラな彼はアイロニーの為に手非道く打ち据ゑられた。彼の唇は苦笑する勇氣さへ有たなかつた。(五十八)

⑨ 書齋にゐる健三は時々手に洋筆を持つた儘、彼等の声に耳を傾けた。自分にもあゝ云ふ時代があつたのかしらかと考へた。

子供は又「旦那の嫌な大晦日」といふ鞠歌をうたつた。健三は苦笑した。(九十四)

⑩ 健三は苦笑しながら煙草を吹かした。(九十九)

【門】では、宗助の内面的な「苦笑」は描かれていないのだが、『道草』に至ると、現実の「苦笑」の他に、健三の心の中や腹の中での、表面に現れない「苦笑」が描かれていることに注目したい。宗助と健三に、「苦笑」が多いという共通点が見られる中にも、そのレベルにおける相違点が窺えるのである。それは語り手の手法の違いなども理由として挙げられるのであるが、宗助と健三のそれぞれの現実に対する姿勢の違いであると考えられることも可能である。宗助の「苦笑」は、自分の現実に対する誤魔化しと諦観のために現れたものと考えられる。一方で、健三の「苦笑」は、己自身と、その周囲へ向けられた皮肉の意味が窺える。対する他者の一人一人にも、健三の「苦笑」は無言の批判となつてゐることが宗助の「苦笑」との相違点として挙げられようか。二人の相違は、問題に対する処し方にも表れてゐる。宗助が、実際に目の前に現れることのない安井の影の脅威にさらされ続けているのに対し、健三の場合は、実際に目の前に現れる島田と対峙し、一旦は彼を退けているという点に違いがある。「苦笑」という共通点を考察してきた結果、宗助と健三の、それぞれの過去に対する姿勢が異なつてゐるという相違点が明らかになつた。



二

次に、『門』と『道草』の共通点の一つとして、御米と御住の「微笑」を考えていきたい。まず御米の「微笑」の例を次に挙げていく。御米の「微笑」については早くから岡崎義恵氏の指摘がある。<sup>(注3)</sup>

① 「一寸散歩に行つて来るよ」

「行つて入らつしやい」と細君は微笑しながら答へた。(一一)

② 「小六さんが怒つてよ。よくつて」と御米はわざと念を押しておいて微笑した。

③ 御米は気の毒さうな顔をして、「でも、行けないんだから、仕方がないわね」と云つて、例の如く微笑した。(四)

④ 過去一週間夫と自分の間に起つた会話に、不図此知識を結び付けて考へ得た彼女は一寸微笑んだ。(六)

⑤ 御米は微笑して、

「大丈夫よ」と云つた。此答を得た時、宗助は猶の事安心出来なくなつた。(六)

⑥ 宵とは違つて頬から血が退いて、洋燈に照らされた所が、ことに蒼白く映つた。宗助は黒い毛の乱れた所為だらうと思つて、わざ／＼鬢の毛を掻き上げて遣つた。さうして、「少しは可いだらう」と聞いた。

「え、餘ッ程楽になつたわ」と御米は何時もの通り微笑を洩らした。御米は大抵苦しい場合でも、宗助に微笑を見せる事を忘れなかつた。(十一)

⑦ 「春も漸やく一段落着いた」と語つてゐた。そこへ清が坂井からの口上を取り次いだので、御米は夫の顔を見て微笑した。(十六)

⑧ たゞ世の中が膨れた。天が波を打つて伸び且つ縮んだ。地球が糸で釣るした毬の如くに大きな弧線を描いて空間に揺いた。凡てが恐ろしい魔の支配する夢であつた。七時過に彼ははつとして、此夢から覺めた。御米が何時もの通り微笑して枕元に曲んでゐた。冴えた日は黒い世の中を疾に何処かへ追ひ遣つてゐた。(十七)

⑨ 「遊びに行くつて、何処へ入らつしやるの」と眼を丸くしない許に聞いた。

「矢張り鎌倉辺が好からうと思つてる」と宗助は落ち付いて答へた。地味な宗助とハイカラな鎌倉とは殆んど縁の遠いものであつた。突然二つのものを結び付けるのは滑稽であつた。御米も微笑を禁じ得なかつた。(十八)

これまで例に挙げたように、「例の如く」(四)や「何時もの通り」(十一)に宗助に「微笑」を見せることを忘れない御米だが、次のような場面も例外として見られることに注意したい。

宗助は年来住み慣れた家の座敷に坐つて、

「汽車に乗ると短かい道中でも気の所為か疲れるね。留守中に別段変つた事はなかつたかい」と聞いた。實際彼は短かい汽車旅行にさへ堪へかねる顔付をしてゐた。

御米は如何な場合にも夫の前へ忘れなかつた笑顔さへ作り得なかつた。と云つて、折角保養に行つた転地先から今帰つて来たばかりの夫に、行かない前より却つて健康が悪くなつたらしいとは、気の毒で露骨に話し悪かつた。(二十二)

これまで見てきたように、御米の「微笑」は、自分と宗助の生活をよりよいものにしようとして、意識して笑つているということが考えられる。御米が自分の不安を隠そうとして笑つているとしても、それは宗助を愛するゆえに、浮かぶ笑いなのであり、宗助にとって御米の「微笑」が救いとなっていることは、⑧の場面から推察することができ

る。

次に『道草』の御住の「微笑」の例を見ていく。

① 「何うぞ口を利いて呉れ。後生だから己の顔を見て呉れ」

彼は心のうちで斯う云つて細君に頼むのである。然し其痛切な頼みを決して口に出して云はうとはしなかつた。感傷的な気分支配され易い癖に、彼は決して外表ゴースト・フェイス的になれない男であつた。

細君の眼は突然平生の我に帰つた。さうして夢から覚めた人のやうに健三を見た。

「貴方？」

彼女の声は細くかつ長かつた。彼女は微笑しかけた。然しまだ緊張してゐる健三の顔を認めた時、彼女は其笑を

止めた。(五十)

② 「人が斯んなに心配して遣るのに」

此感じを翌る日迄持ち続けた彼は、何時もの通り朝早く出て行つた。さうして午後に戻つて来て、細君の熱がもう退めてゐる事に気が付いた。

「矢つ張何でもなかつたのかな」

「えゝ。だけど何時又出て来るか分りませんわ」

「産をすると、そんなに熱が出たり引つ込んだりするものかね」

健三は真面目であつた。細君は淋しい頬に微笑を洩らした。(八十二)

① 細君は遠くから暗に健三の景色を窺つた。

「一体何うしたんです」

「勝手にするが好いや」

「また御金でも呉れろつて来たんですか」

「誰が遣るもんか」

細君は微笑しながら、そつと夫を眺めるやうな態度を見せた。(九十)

健三と御住は一見して、仲の良い夫婦とは言えないだらう、擦違ひが多く、口を開けば問答になつたりする。しかし、だからこそ、①の例は、御住にとって、非常に自然な「微笑」だったと考えることができるのではないだらうか。

自分のヒステリーの症状を心配する健三の表情を見て、御住はその「微笑」を止めてしまおうのだが、健三と御住は、御住が病気の時には、お互いに素直な気持ちになれるのである。<sup>(注1)</sup>

## 三

ここで「門」の宗助と御米の夫婦について考えてみる。宗助と御米の仲のむつまじさは、「その晩宗助は裏から大きな芭蕉の葉を二枚剪つて来て、それを座敷の縁に敷いて、その上に御米と並んで涼みながら、小六の事を話した」(四)などの箇所からも窺える。<sup>(注5)</sup>ここまでの考察で、御米がいつも宗助に「微笑」を見せるようにつとめているということが明らかになった。御米の「微笑」は、自分たちを「翻弄する運命」(四)に対する不安から生じるものであろう。御米は「微笑」することで、それをやわらげようとしているのである。<sup>(注6)</sup>その一方で、「門」の中には次のような描写もある。宗助は、坂井の家で聞いた、安井の接近している事実を御米に伝えることができない。宗助が坂井から安井のことを聞いたあとで、御米と寄席に行くのだが、そこから次のような御米との距離感の発露が窺えるのである。

彼は高座の方を正視して、熱心に浄瑠璃を聞こうと力めた。けれどもいくら力めても面白くならなかった。時々眼を外らして、御米の顔を偷み見た。見るたびに御米の視線は正しい所を向いてゐた。傍に夫のある事は殆んど忘れて真面目に聴いてゐるらしかった。宗助は羨やましい人のうちに御米まで勘定しなければならなかった。(十七)

宗助と御米は、お互いを大切に思い、寄り添いながらも、忍び寄る運命に翻弄され、末尾の重ならない視線が表す

ように、本心から心を通い合わせることが難しい夫婦として描かれているのではないだろうか。<sup>(注7)</sup> 宗助は「苦笑」<sup>(注8)</sup>、御米は「微笑」することによって、二人はお互いを本当に理解し合うための距離にはいないということが指摘できる。<sup>(注9)</sup> 『道草』の健三と御住の場合はどうであろうか。「苦笑」が多く見られる健三の「微笑」する場面は二例あるが、そのうちの二つを次に挙げる。<sup>(注10)</sup>

「是は誰の子？」

健三の手を握つて、自分の腹の上に載せた細君は、彼に斯んな問を掛けたりした。其頃細君の腹はまだ今のやうに大きくはなかつた。然し彼女は此時既に自分の胎内に蠢めき掛けてゐた生の脈搏を感じ始めたので、その微動を同情のある夫の指頭に伝へやうとしたのである。

「喧嘩をするのは詰り両方が悪いからですね」

彼女は斯んな事も云つた。夫程自分が悪いと思つてゐない頑固な健三も、微笑するより外に仕方なかつた。(六十五)

ここは普段は喧嘩ばかりの二人の距離が縮まつたと感じさせる場面である。妻が夫にお腹の子に触れさせるということは、一般の夫婦にとっては特に普通の行為であるようにも思われる。しかし、生まれてすぐに島田夫婦のもとへ養子に出され、肉親の情から遠く隔絶されて育つた健三にとっては、この御住の仕草は、自分の存在する場所は此処なのだ、と再確認させる、意味の深い行為であつたのではないだろうか。<sup>(注10)</sup>

健三と御住は決して寄り添つてはいない。お互いに一步も譲らずに、常に全力で喧嘩をするし、憎み合っているのではないかと思われるような場面も多数見られる。しかし、相手に対して、お互いに、自分を取り繕つたりすることはしない。だからこそ、浮かぶ「微笑」は本物なのではないかと考えるのである。彼等は普段は決して仲が良いとは

いない夫婦だが、『道草』における「微笑」は、『門』の「微笑」とは対照的に、自然に浮かぶものとして描かれているということを指摘しておきたい。「笑い」を通して、夫婦の姿の描かれ方に変化が窺える。そこには作者漱石自身の、夫婦という形の捉え方の変化が表れているのではないだろうか。

注

注1 『門』の末尾において、御米は春の空を見上げ、宗助はやがて来る冬を思い、下を向いている。対照的な様子の二人の視線は交わることがない。『道草』においても、健三の視線にははっきりとしない所はあるが、御住の視線は赤ん坊へと向けられており、二人の会話は噛み合っていない。『門』と『道草』の末尾において言えることは、夫婦の間の視線が交わらないことにより、心の中の距離が窺えることである。越智治雄氏はこの場面について次のように述べられている。

「本当に有難いわね。漸くの事春になつて、「うん、然し又ちきに冬になるよ」(二十三)。語調は、『道草』末尾の健三が「世の中に片付くなんでものは殆んどありやしない」という際の「吐き出す様に苦々し」いものとは、違っているだろう。文字どおり小康に恵まれた夫婦のささやかな幸福や不安は、春の陽光に包まれているのである。

〔漱石私論〕 角川書店 昭46・6 194頁

一方で、相原和邦氏は次のように指摘されており、越智氏と同じく、この末尾において夫婦の間の断絶を見てはならない。作者は御米と同じく宗助にも春のよさを感じていたと見なくてはならない。(中略) 最も重要なものは、宗助の参禅やその失敗なのではなく、その結果として得た彼の人生認識に他ならない。繰り返すまでもなく、「天の事」がいつまでもついてまわるという認識、「門外に佇むべき」運命の認識がそれであった。宗助が発した「しかしまだ冬になるよ」という結びの一句は、紛れもなく、そのような新たな認識の表明として、千鈞の重味を持っている。

〔漱石文学の研究——表現を軸として——〕 明治書院 昭63・2 270頁

『門』の末尾において迎えた春を、あたたかいものとして、両者とも指摘されていることを留意しておく。『門』の末尾において、確かに夫婦の上に小康状態が訪れ、春の陽気に包まれたまま、作品が終結していくのは理解されるが、今回の論文においては、『道草』との共通点として、両作品の末尾から、小康状態を迎えるが、『門』においては安井の脅威、また『道

「草」においては島田の脅威といった問題を抱えたままの終結であることに着目しているので、両氏の意見は参考までにとどめさせていただく。

注2 「心」の先生にも「苦笑」が数多く見られることも指摘しておく。先生の「苦笑」は、以下「上五」「上九」「上二十二」「上二十六」「上三十三」「下二十五」「下三十三」「下五十三」の九箇所に見られる。先生の「微笑」は二例で、「上二十四」「上二十七」に見られる。静は「微笑」が一例、Kは「微笑」が一例見られる。この中で注目したいのは、静とKの「微笑」の場面である。先に静の例を挙げる。

「それが解らないのよ、あなた。それが解る位なら私だつて、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」

奥さんの語気には非常に同情があつた。それでも口元丈には微笑が見えた。外側から云へば、私の方が真面目だつた。  
(上 十二)

これは、先生が何故以前と変つてしまつたのか解らないと言って、静が「私」に打ち明ける場面であるが、ここで静が見せた「微笑」は、「私」には理解することの出来ない、静の先生へと向けられた感情である。

次にKの「微笑」する場面を挙げる。

Kは御嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係に就て、最初は左右ですかとたゞ一口云つた丈だつたさうです。然し奥さんが、「あなたも喜んで下さい」と述べた時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑しながら、「御目出たう御座います」と云つた儘席を立つたさうです。(下 四十七)

先生の回想の中で、Kの唯一見せる「微笑」がこの場面である。先生と静の結婚が決まり、奥さんからそれを聞かされる場面で、Kは奥さんの「あなたも喜んで下さい」という言葉に応えるために、表面的には「微笑」を返している。Kはすでに死の「覚悟」(下 四十二)をしていたために、落ち着いていたということも考えられようが、この「微笑」の内面においてKは、それまではまだ漠然と考えていた死の時を、目前に感じたために、ついに実行に移す覚悟を抱いたのではないだろうか。

他の漱石作品における「笑い」も、重要な場面において、登場人物の心情を窺わせる機能を果たしていることが考えられる。外側に表れた「笑い」の内側にこそ、登場人物の本音が隠されている。特に「心」における「笑い」については、今後考



察を続けたい。

注3 岡崎義恵氏は御米の「微笑」について、早くから着目されたうえで、次のように述べられている。

偽善的な作り笑ひではなく、愛による宗助への信頼と、又それによつて過去の暗さから救ひ出されてゐる心の平安とがなければ、この微笑はこのやうにいつも浮び上つてくることはないであらう。

(「門」の御米)『漱石と微笑』東京ライフ社 昭和31・2 21頁

注4 水谷昭夫氏は次のように指摘されている。

大風の中の優しい陽だまりのようなやさしさとして妻の錯乱を描いているのである。作品からこの箇所を切り取つて、異常な人間関係の中にかかる異常なドラマだという断案はあたらない。著者は細君を「ヒステリー」と書く。この錯乱のなかでのみ、二人のこころはむすばれている。この朦朧状態から覚めると、再び、静かな修羅がゆるやかににはじめられるのである。

(「漱石文芸の世界」 桜楓社 昭和49・2 198頁)

注5 むつまじい夫婦としての二人の姿は次の二つの場面にも表れている。

①宗助はそれから湯を浴びて、晩食を済まして、夜は近所の縁日へ御米と一所に出掛けた。さうして手頃な花物を二鉢買つて、夫婦して一つずつ持つて帰つて来た。夜露に中てた方がよからうというので、崖下の雨戸を明けて、庭先にそれを二つ並べて置いた。(四)

②縁先は右の方に小六のある六畳が折れ曲つて、左には玄関が突き出してゐる。その向うを塀が縁と平行に塞いでゐるから、まあ四角な囲内といつていい。夏になるとコスモスを一面に茂らして、夫婦とも毎朝露の深い景色を喜んだ事もあるし、また塀の下へ細い竹を立てて、それへ朝顔を絡ませた事もある。その時は起き抜けに、今朝咲いた花の数を勘定し合つて二人が楽にした。(八)

二つの場面とも「夫婦」という言い方が二人の仲のよさを象徴している。

注6 曾秋桂氏は御米の「微笑」について次のように述べられている。

より積極的な働きかけを伴つて応答局面に使われている場合が全体の約半数であり、明らかに、御米が主体性を持つて、二人の関係を維持、修復しようとする表徴と見ることが出来る。(中略) 御米の「微笑」は、二人の夫婦生活を円満に営む上で、御米が払った努力の証だと考えられる。

〔「門」の御米の人物像を読み解く——「拒否」「からかい」「微笑」の身体表現を通して——〕

「日本研究」 17号 日本研究研究会 平成16・2 13～14頁

注7 坂本育雄氏は次のように指摘されている。

生活者としての妻と、観念的志向に促われた夫との対照的な姿を描き出した小説だと言える。

注8

岡村あいこ氏は「夏目漱石【門】論——「笑い」について」の論文において、次のように指摘されている。  
〔門——御米の微笑〕「国文鶴見」31号 鶴見大学日本文学会 平成8・12 87頁

御米の微笑も、宗助の苦笑もお互いの本心を曖昧にし、お互いに孤独の陥れていくものでしかない。またそれぞれの「笑い」も明るさを見いだせるものでなく、相手との断絶や冷ややかな視線を思わせるものである。

〔「夏目漱石【門】論——「笑い」について」〕「広島女学院大学大学院言語文化論叢」6号

注9

健三の「微笑」する場面のうちもう一例を補足しておく。

広島女学院大学大学院言語文化研究科 平成15・3 57頁

「己のは黙つて成し崩しに自殺するのだ。気の毒だと云つてくれるものは一人もありやしない」

彼はそう思つて姉の凹み込んだ眼と、瘦けた頬と、肉のない細い手とを、微笑しながら見てゐた。(六十八)

この健三の「微笑」の心情は敢えて伏せられている。この健三の「微笑」は、周囲の己に対する無理解に向けられた諦観であると表面的には受け取ることができる。しかし、それだけならば、「微笑」とせず、「苦笑」とすればよいのである。

この「微笑」には、健三の諦観と、いづれ老いる己の未来の姿を姉に見て、継続していく生と、いつか訪れる死に対して、姉に代表される人々とは確実に異なつた認識を持ち得たという健三の変化が表されているのである。

注10

〔「道草」「四十一」に次のような場面がある。

彼等が長火鉢の前で差向ひに坐り合ふ夜寒の宵などには、健三によく斯んな質問を掛けた。

「御前の御父ツさんは誰だい」

健三は島田の方を向いて彼を指した。

「ちや御前の御母さんは」

健三はまた御常の顔を見て彼女を指さした。

是で自分達の要求を一応満足させると、今度は同じやうな事を外の形で訊いた。

「ちや御前の本当の御父さんと御母さんは」

健三は厭々ながら同じ答えを繰り返すより外に仕方がなかつた。然しそれが何故だか彼等を喜ばした。彼等は顔を合せて笑つた。

(中略)

「健坊、御前本当は誰の子なの、隠さずにさう御云ひ」

彼は苦しめられるやうな心持がした。時には苦しいより腹が立つた。向ふの聞きたがる返事を與へずに、わざと黙つてゐたくなつた。(四十一)

幼い健三は、本当の両親でもないのに、幾度となく島田夫婦からかけられる質問に、このような偽りを言わなければならなかつた。それは健三にとって、自分の存在を根底から揺るがせるやうな出来事であつただろう。島田夫婦の打算是明らかであり、彼らは、長じた健三に金の無心をするようになる。

「六十五」において、御住は「是は誰の子？」とお腹の子に健三を触れされる。御住の声は、かつての島田夫婦の声とはまったく違つた声音で響いただろう。